【報告】「読み解く力」向上フォーラム

１　フォーラムの概要

（１）日　時　　令和元年（2019 年）５月９日(木)13：30～16：40（受付 13：00　～　）

（２）場　所　　滋賀県庁新館７階　大会議室

（３）プログラム　13:30～ 13:50　開会行事　挨拶　滋賀県教育委員会　福永教育長

説明　滋賀県教育委員会　櫃原教育次長

13:50～14:30　講演Ⅰ「読み解く力」と２１世紀の学び

〈講　師〉東京大学　教授　藤江　康彦　氏

14:30～15:15　講演Ⅱ「読み解く力」育成のための視点

〈講　師〉京都女子大学　教授　水戸部　修治　氏

15:35～16:35　パネルディスカッション

〈パネラー〉　東京大学　教授　藤江　康彦　氏

京都女子大学　教授　水戸部　修治　氏

〈コーディネーター〉　京都大学　教授　土井　真一　氏

２　参加者　　<u>合計　３０４名</u>

（内訳）

校種等	参加人数	備考
県教育委員会	６０	運営スタッフも含む
市町教育委員会	２７	教育長（５人）も含む
小学校	１０５	「読み解く力」推進員（１７人）も含む
中学校	４８	「読み解く力」推進員（１８人）も含む
高等学校、特別支援学校	５８	スーパーバイザー（２人）も含む
図書館	6	市町立図書館

※報道関係（NHK）３人

３　フォーラムの内容・講演等

（１）教育長挨拶（滋賀の教育大綱の策定と「読み解く力」の育成について）

滋賀ならではの学びである「読み解く力」の育成について、教育に携わる関係機関が共通認識を図っていくこと。

（２）次長説明（「読み解く力」とは）

生きる力を育むための学ぶ力の向上、授業・保育による自力解決への適切な指導と基礎的・基本的な知識・技能の習得、「読み解く力」の２つの側面と３つのプロセスの説明、就学前からの読書習慣の定着や子どもたちの読書活動の充実を図っていくこと。

（３）講演Ⅰ「読み解く力」と２１世紀の学び　〈講　師〉東京大学　教授　藤江　康彦　氏

○２１世紀の教育に求められることは、生涯学び続けるための基盤を創ることである。

○キーワードは「主体性」（目的・動機に基づく、他者に影響を与える、対話的である）

○「子どもが学び続ける」授業（子どもにとっての学習環境として授業をとらえる）

○子どもに対する「見方・考え方」を変える。教師が学び続ける環境を創出する。

（４）講演Ⅱ「読み解く力」育成のための視点　〈講　師〉京都女子大学　教授　水戸部　修治　氏

○「読み解く力」の重要性について共通理解を図る。

・各教科等、各学年の資質・能力や学習活動と「読み解く力」との関係を『学習指導要領解説』を手掛かりに明らかにする。

○日常の学習指導の質を高める。

・質の高い学習過程の構築、目的や必要性を実感する交流の場の設定。

○学校全体で取り組む。

・各学校等における重点の設定、各教科・学年等における重点単元の設定

（５）パネルディスカッション

○講演Ⅰ、Ⅱの内容をもとに、次の３点についてパネルディスカッションが行われた。

・「読み解く力イメージ図」での２つの側面やその関連性はどう捉えたらよいか。
→２つの側面を相互関連させながら進めていく。イメージ図の右側が左側を支える。

・学習指導要領の全面実施に向けて、学習指導要領での資質・能力の３つの柱や「主体的・対話的で深い学び」との関連性についてどう捉えたらよいか。
→どの柱においても「読み解く力」は基盤となる。「読み解く力」の育成は、「主体的・対話的で深い学び」ともつながるものである。

・各学校で「読み解く力」を重点に取組を進めていく上でのポイントは何か。
→授業改善を中核とした教育の質の向上を図る取組として位置付ける。
優先順位(課題は何か)、役割分担(一人がするのではなく)、協力(力を合わせ創っていく)

○フロアからの質問について

・「読み解く力」の育成は、教科の枠にとらわれるのではなく、全ての教科等で実施。
・状況判断が苦手な子どもには、文脈や状況の中で、相手の思いや考え、その背景を意識するようにしていく。
・子どもが人やものと向き合うことは、幼児教育の中にも通じるものである。

４　フォーラムの総括

（１）フォーラム後の参加者アンケートから

質問項目『「読み解く力」がどのようなものかわかった』

（4：あてはまる　3：どちらかといえばあてはまる　2：どちらかといえばあてはまらない　1：あてはまらない）

選択肢	回答数	割合(%)
4	85	38.9
3	119	54.5
2	10	4.5
1	0	0.0

※　アンケート回収数　218（無回答　４人）

○肯定的に回答した割合（%）が 93.3%であり、「読み解く力」に関する共通理解を図ることができたフォーラムであったと考えている。

質問項目『なぜ、今「読み解く力」に重点をおいて取組を進めるのか、わかった』

（4：あてはまる　3：どちらかといえばあてはまる　2：どちらかといえばあてはまらない　1：あてはまらない）

選択肢	回答数	割合(%)
4	93	42.6
3	113	51.3
2	4	1.8
1	1	0.4

※　アンケート回収数　218（無回答　７人）

○肯定的に回答した割合（%）が 93.9%であり、「読み解く力」の必要性・重要性についての理解を促すことができたと考えている。

（２）まとめ

○小中学校、義務教育学校、高等学校ともに、『校内で「読み解く力」についての共通理解を図り、学校全体の取組となるよう研究体制を整えたい』という記述が多く見られた。管理職の参加を促したことによると考える。これが学校全体の取組につながるよう、さらなる支援が必要である。

○小中学校の参加者からは、『学校で取り組んでいることを、家庭・地域へも発信したい』という記述があった。学校、家庭・地域が一体となった取組の実現につながる考えである。

○高校の参加者からは、『小中学校で「読み解く力」を育まれた子どもたちを、県立学校として受け入れていくことの責任や、何を本校の柱とすべきなのか考えていきたい』といった、学校間の接続を意識した記述があった。合同開催による効果であると考える。

○図書館の参加者からは、『公立図書館として、学校や学校図書館等と連携してどのようなバックアップができるかを考え、実践していく』という記述が多く見られた。

○具体的な指導についてもっと知りたいという記述もあった。プロジェクト研究での取組の充実とその周知等についてよりよい方法を考えていく必要がある。